

た。遂にはどうもやり切れなくなつて、某教授の情で一週間を限つて學習院本を借覽させて貰つたこともあつた。今も筐底に残つて居る洋野昏何百枚かの細字の寫しは、この當時の貪讀の記念である。だから明治四十四年に十何圓かでこの書の再版を購うた時には、全く勿體ないやうな氣持がした。併しそれはその當座の事で、その後は格別有りがたみも覺えず、大して精讀もしないことを思ふと、書物は稀觀の方がよいのかも知れない。

此の書物ですらかゝる有様であつたから、その他の稀觀書、例へば元朝祕史とか元典章とか、ラシッドの蒙古史のベレジン譯とかいふやうなものは、到底手に取つて見ることは出來ず、當時日本では、若い學徒の蒙古や中央亞細亞史などの研究に志すことは、高嶺の月を捉へようとするにも等しい覺束ない事業であつたといはねばならぬ。今日の學界からは一寸想像も及ばぬところである。

余は今日までの自分一個の爲ではなく、余の奉職する大學の爲に、また更に廣く一般學界の爲に、諸種の研究資料や書籍を集めることに、烏滸がましけれど幾らか努力を拂つて來た積りであるが、これはかゝる時代に修學の道を辿つて、資料の不足に少からず苦しんだ經驗によるところが少くない。今は課せられた題に應じて、資料蒐集に關する二三の憶出を記して見よう。

明治四十五年四月の初めから五月の初めにかけて、滿洲奉天の宮城内で、内藤湖南博士と共に、滿洲文の太祖太宗の實錄、即ち滿文老檔と稱する記録や、五體清文鑑即ち漢・滿・藏と新疆のトルコ語の五體對譯の語彙、合せて一萬餘枚をすべて寫眞にして將來したのは、余にとつて研究資料を大仕掛に蒐めることに手を着けた最初の事業であつた。費用その他の事情もあつて、撮影萬端を寫眞師に任せず、主として湖南博士や自分の手でやり、まだ手先